

カルヴァンの聖餐論

金田 幸男

一五二九年一〇月一日から四日まで、マールブルグ会議が開催された。この会議は、ヘッセン地方伯フィリップの仲介によるものでルター・メランヒトンらドイツの宗教改革者、バーゼルのエコランパディウス、ストラスブルグのブツツァーら南ドイツの帝国都市宗教改革者、それに、チューリッヒのツウイングリらが出席した。一般に、このマールブルグ会議は、福音主義者の不一致を露呈した事件とみられているが、それは一方的な見方にすぎない。もともと、この会議は、その年の春のシユパイエル国会の福音主義者に対する威嚇的決定を契機にして、フィリップの福音主義者の一致の必要の認識に基づいて、行われたものであった。ドイツ及びスイスの福音主義者の結合が画策されていたという側面を、この会議の評価から、見落してはならない。残念ながら、出席者は、信仰義認等の基本的教理事項において承認できたが、第一五項聖餐の問題について当面の合意を得ることができず、「互いの良心の許す限り、キリストの愛を示し合うべきである」ということを決議したにとどまっ

た。このことを別の見方からすれば、聖餐論についての合意こそが福音主義者の一致の要件であったわけである。

一五二四年一月一六日の日付のある、ツウイングリからトイス・アルバーにあてた手紙の公表以来、ルターとの間に、激しい制定辞の解釈、ひいては聖餐論の本質を巡って、論争がつづけられていた。その論争の頂点が、マールブルグ会議であった。この会議の後、ドイツ福音主義教会とスイス改革派教会の間で論争が継続され、ついに一致をみることはなかったが、両者の間が決定的に決裂したとみるのは正しくない。むしろ、協調の努力は、絶えず続けられていた。

その第一の例が、ツウイングリ側に立って、マールブルグ会議に出席した、マルティン・ブツツァーの努力である。これは一五三六年の「ヴィッテンベルグ協約」に結実する。

その第二の例がカルヴァンである。彼は、ルターの後の神学的論争の指導者となったヨアヒム・ウエストファルと聖餐論争に従事するが、この論争は不一致を見出すための論争ではなく、少なくとも、カルヴァンにとっては、ルター派教会との協調点をどこで見出すかとの観点を失っていないのである。

一五三六年という年は、以上のように、福音主義者の陣営において、希望と挫折の年であるが、この年、カルヴァンは、キリスト教綱要初版を刊行している。聖餐論争において問題となっている点を、カルヴァンが黙過する筈はない。むしろ、福音主義教会を引き裂きもし、つなぎあわせもするこの課題に取り

組むのである。

(一六世紀の聖餐論争史については、筆者の収める教会の春名純人長老に紹介していただいた *Wissenschaftliche Buchgesellschaft* がリプリントした *Ernst Bizer: Studien zur Geschichte des Abendmahlsstreits im 16. Jahrhundert* を挙げたい。)

カルヴァンの聖餐に関する文献は、下記のものである。

- 一 キリスト教綱要初版(四章) 一五三六・三
- 二 信仰の教育(手引) 一五三七・二・一八
- 三 聖餐に関する信仰告白 一五三八
- 四 聖餐に関する小論 一五四一・九・一六
- 五 ジュネーブ教会信仰問答書 一五四二
- 六 チューリッヒ教会との聖餐に関する協定書 一五四九・八・一
- 七 聖礼典に関する健全にして正統なる教理の擁護——その性質、効用、限界、用法及び欠点 一五五五
- 八 ウェストファルの非難に対して、聖礼典に関する、敬虔正統なる信仰の弁明書 一五五六・一・五
- 九 ウェストファルに対する最後の勧告 一五五七
- 一〇 キリスト教綱要最終版 一五五九
- 一一 テイレマン・エスフスの散らされた庶民にあてた、聖餐においてキリストの血と肉に与ることについての聖なる教理の明解 一五六一

これらの諸論文は、その時の状況に即して力点の置き方は異なるけれども、福音主義教会を引き裂いている聖餐論争に解決を探らうとするカルヴァンの意図を尋ねることができる。中でも、「聖餐に関する小論」は、カルヴァンの初期における聖餐論が簡潔に要約されているし、また、「キリスト教綱要」最終版は、初版からの聖餐論の基本的構造を引き継ぎながら、後のウェストファルとの論争についても要約されている。それで、この二つがカルヴァンの聖餐論を取り扱う場合に、基礎資料になると考える。

「キリストのまことの体と血が、体をなして、主の晩餐のパンとぶどう酒の中に現臨することについては、今の時、私たちがの間では同意を得られなかった。」これは、マールブルグ会議における協議事項第一五項の一部である。福音主義者を、聖餐論において一致させることのできなかつた問題は、聖餐におけるキリストの現臨(リアル・プレゼンス)にあった。聖餐論における調停を試みようとするれば、この問題を解決する必要があった。

「聖餐に関する小論」において、ルターとツウイングリとの両説の特徴を把握した上で、両方に批判を加えている。一致は、最大公約数的に共通項というべき教理部分を抜粋して列挙するだけではありえない。

簡単に言うと、ツウイングリは、ルターの教説にキリストの肉の現臨の残存を認めたため許しがたい偶像礼拝となしたが、

ルターはツウイングリを霊的本質の喪失した印だけ残すものと把握した。論争が始まると、反対者論破のため誇張した論法が取られたり、明瞭に語られなかったりして、論争は錯綜してしまった。

そこで、カルヴァンの批判と主張が明らかにされなければならぬ。カルヴァンはルターとその後継者の主張の中にある場所的現臨の立場を斥ける。カルヴァンによれば、ルター派の主張の根拠になっているのは、そのキリストの現臨在の存在方式の問題と、属性の交流という理念の問題である。前者に対して、その問題が制定辞の解釈をめぐってであることを明白にしている。パンがキリストの御体であるという文字を非常に強調して、パンはキリストの体であると信じなければならぬ、一歩退いても、「パンと共にパンの内に、パンの下に」と表現しても、それは文字の拘泥に他ならない。むしろ、ツウイングリのように、単に象徴的に解されてもならない。そこで、カルヴァンは、制定辞が、換喩法を用いた表現であると述べる。換喩法というのは、神が「柴」においてモーセにあらわれたように、聖霊が鳩のように下ったというように、すぐれたものの名が、より劣ったものに移されたり、目にみえるしるしが、それによって意味される「ことからそのもの」に帰されたりする表現方法である。ニーゼルのいうように、地上的エレメントは、霊的事実を確信させるため、目にみえる形で提示するだけのものではなく、事柄そのものをも差し出すのである。(ニーゼル

『カルヴァンの神学』渡辺訳、三二二—三二三頁)

第二の問題について、カルヴァンは、慎重な言いまわしをしている。固有性の交流について、教父達も語っていることを承認する。しかし、ルター派、特にウェストファルの主張を取れば、多くの誤りを招いてしまう。固有性の交流の問題は、結局キリスト論の問題である。キリストは昇天後、その人性がこちらに遍在することはありえない。またキリストの人性を拡大して地上にまで無限に広げることはいかなる。フランソワ・ヴァンデルによれば、カルヴァンの聖餐論は、できるだけオリジナルなもの、つまり、できるだけ古い教理にさかのぼろうとしている。洗礼論では、アウグスティヌスをはじめ教父や、ブツァーその他の改革者から多く引用するが、聖餐論になると、そのような引用が激減する。ここに、カルヴァンの調停者としての性格を見出す。同時代の論争の一方に加担して巻き込まれることではなく、聖書の教理に、そして古代に確立された教理に遡って議論を展開していく。渡辺信夫氏は、『カルヴァンの教会論』において、これが、カルケドン信条のキリスト論をふまえた聖餐論であると把握している。

カルヴァンにとって、キリストは、聖餐において現臨される。しかし、ルター派とは区別されて、それは、いかなる意味でも、肉の場所的及び実体的現臨でありえない。霊的現臨在でなければならぬ。そして、キリストは、御霊によって、たしかに現臨されるのである。

ることを、改めて感じさせられる。

(改革派宝塚教会牧師、神戸改革派神学校講師)

ジョン・ウェスレーの聖餐論

岩本 助 成

一、研究の視点

J・ウェスレー(一七〇三—一七九一)は、生涯変わることなく聖餐を重要視した。彼が執行し受領した回数驚くばかりに多い。回数が多さで事の重要性を測るのを嫌った彼だが、習慣的で他律的な受領を拒否しつつも、何故にかくまで聖餐を尊重したのか。彼を第十八世紀の英国における福音的信仰覚醒運動(the Evangelical Revival)という視点においてのみ捉えようとする者は多い。逆に彼を、礼典(殊に聖餐)覚醒運動(the Sacramental Revival)においてのみ捉えようとする試みもある。しかし問題解決の真の鍵は、両者の相互関係にのみ存する。この視点を失うと、ウェスレーと彼の運動の総体的把握、彼の神学的特質の理解も困難となる。

二、その歴史的・神学的背景について

これは、当然、陪餐者が、如何にして、キリストの現臨在に与るのか、という問題に移行する。いかえれば、キリストとの交わりの問題である。その場合、カルヴァンは、「キリストがわれわれのものとなり、われわれがキリストのものとなる」キリストと一つになる神秘的結合こそが問題なのであるという。どのような結合かは奥義であり、自然に基づいて理解できない。しかし、LECのキリスト教綱要の訳者バトルスは、カルヴァンが、この奥義を知的不可解として扱わず、説明できないが、信者の効果的变化の上にあるものという。この場合に、聖霊が重要な役割を果されると説くことによって、聖餐論と聖霊論の有機的關係が確立される。

更に、聖餐におけるキリストとの交わりの問題をめぐって、カルヴァンは、説教との関係を重視する。聖礼典は「みえる御言葉」である。御言葉とはなれては、聖礼典は正しく執行できない。これが、カルヴァンの確信であった。そして、聖礼典は、宣教そのものにとどまらざるべきなす。(D.S. Wallace: Calvin's Doctrine of the Word and Sacrament を挙げた)

第二世代に属する宗教改革者としてのカルヴァンの、聖餐論における調停の試みは、妥協や政治的工作によるものではなく、むしろ、冷静に真理を提示するより他はないとの確信の上に立ってなされている。カルヴァンが、一般的な、融通性のない非妥協的な神学者というイメージとは程遠いものであ

第十七、及び第十八世紀の英国国教会の状況、国教会内での

ソサエティ活動、非国教徒の活動などが正しく概観されねばならぬ。特に、英国宗教改革者からの歴史的系譜が綿密な研究の積み重ねによって正確に辿られねばならぬ。二人の研究者に注目したい。岸田紀教授は、少なくとも初期のウェスレーは、「完全なアルミニアンニズムの世紀」に生きた、アルミニアンのロード(W. Laud)派高教会主義の系譜に立つ者として、歴史的研究を続けられる。(因に、アルミニアンニズムに対する教会史的研究は未だ開拓すべき領域を多く持つ。英国におけるそれと、オランダにおけるそれとの混同などが指摘されている)。

オックスフォード大学、Jesus College のウォルシユ(J.D. Walsh)も、ウェスレーをより広汎な、Evangelicalsの史的研究から再検討しており、今後の研究成果が期待される。

ウェスレーの聖餐論形成には、熱烈な高教会アルミニアンであった両親、ロード派の高教会主義神学、教父学の研究、カロライン神学者の伝統が息づくオックスフォード大学、ひいてはモラヴィア派との接触、同派に流れる静寂主義による聖餐否定との対立など、重要な契機が存在する。又、アルダスゲート体験の評価も課題である。筆者はウェスレーの聖書的・体験的キリスト教の真实性を理解するが、同時に冒頭に述べた視点を忘れて徒に対立的、図式的理解を繰り返すことに賛同し難い。その福音的回心の明確さと共に、われわれは彼の聖餐経験がアルダスゲート以後も深化こそすれ、いささかも変化しなかった事

トの誤解や混乱にも拘らず、彼は「しるし」をして単なる象徴と見ることに激しく反対した。

さてウェスレーの聖餐観は以下の各項に分けて検討し得る。

(1) キリストの苦難と死の「記念」として

近年、記念(アナムネーシス)の聖書の意味が解明されつつある。彼はそれが単なる歴史的出来事の想起や受難の追憶より以上のものであることを看破していた。受領者は、「今、ここで」キリストの贖罪の恵みのすべてに参、与せしめられる。聖餐において過去の出来事としてのキリストの十字架が記念されるのではなく、十字架と復活の主、現臨のキリストが、礼拝の源泉と対象として仰がれるのである。それは我らのために死んで甦り給うた主の喜びの宴として守られる。

(2) 「しるし」として

物素はキリストの体と血との「しるし」であるが、現実には真の受領者に恵みを伝達する。伝達の具体的道筋は秘義に属するが、「魂の食物」「生命のパン」の力はわれわれの中に現実に生起する。

(3) 「恵みの手段」として

聖餐受領を功績化する人々及び、恵みの手段を軽視する人々とウェスレーとは対立する。それは恵みそのものの代用として魔術化されたり、恵みと分離され対立されてはならない。物素は、「現存する実在の表示のしるし」である。彼は恵みの手段を、祈り、愛餐、断食、告白、集会励行や愛の業、御言の黙想

実に注目せねばならぬ。

三、聖餐論の概観

ウェスレーは単に礼典に限らず、他の一切を見るのに、四つの規準を備えていた。第一の最も根本的な規準は、「一書の人」にして当然のことながら、聖書である。第二には理性、第三に経験、第四に古代教会の伝統、即ち、その教会実践の普遍的模範がある。まず聖餐は聖書に立証される神の制定である。ウェスレーはいかに聖書の多様な表現を用いつつ、この一事を力説したことであろうか。それは神の与えたもう恵みの手段である。又、彼自身の生活や実際の活動の中で具体的に体験し人々を指導して見て、適切と理解でき有効と判断できた。更には国教会の伝統(祈禱書、三九箇条、典札、説教集など)を覚醒させるものでもあった。「私がこれを使うことの中に、少しの功績もない。……しかし、神が命じられるから、私はするのである」。このような典型的なプロテスタントが、その聖餐尊重のゆえに、生涯、法王派として中傷攻撃を受けたことは皮肉ではあるが、実はこの微妙な一事にこそ、問題の核心が物語られているのである。

アウグスティヌスの表現ではあるが、「しるし」が結びつける「こと」がそのもの」とは何か。ウェスレーは「罪への死と義への新生」^④と答えている。「しるし」は「こと」がそのものと同一視されないが、同時に、分離もされない。後代メソジス

と聴従という多様性で理解したが、聖餐の中心的位置は動かなかった。

(4) 聖餐と終末論

聖餐は「来るべき王国の晩餐の型」である。又、召されし兄弟たちと共に食卓に連なることを自覚した。

(5) 聖徒の交わりとして

勝利の教会と戦闘の教会との交わりの食卓、ここに源泉を持たぬ愛の交わりも奉仕も深化しない。

(6) 犠牲として

永遠の大祭司であり犠牲であり給うキリストの自己奉献以外に犠牲はない。しかもキリストは一度かぎり、然して永遠に、神の御前に自らを献げ、それを聖餐の中でくりかえして我らに示し給う。

(7) 自己奉献として

キリストは教会を「我が体」として自己同一したもう。「キリストと共に」自らの体を奉獻せずしては、我らはその体の肢としての一切をも失う。

(8) 「キリストの現在」

この点ではウェスレーはカルヴァンの解釈に近いと思われる。母ズザンナとの文通に彼の理解の一端をうかがえる。彼は又、神性と人性の問題よりも、父・子・聖霊なる神の一体性により強い関心を示した。三一の神の礼典的現在を信じ、その神が受肉と十字架と復活の恵みのすべてを受領者に分ち与えられ

るとした。後代のメソジストによるウエスレーのこの観点のツ
ウィングリーの解釈は奇妙な現象と言えらる。彼には Dynamic
Presence, Living Presence と表現し得る現在観が確立してい
るからである。

この他、(9) 聖餐受領者について、(10) 聖餐の奉仕者につ
て、も考察される。

四、結論

A.C. Outler は、「メソジストは、教会論を持つか」を問い、「
小ぢく否」と「大きな然り」とを答えている。彼らは当初、
ソサエティの一員で教会形成の意図もなく、ウエスレー自身、
国教会への敬愛に燃えていた。同時に、ウエスレーの教会論は
深いものを持つ。更に、伝道活動や聖餐覚醒運動が具体的に教
区に阻まれていた時期の「世界は我が教区なり」との一句は興
味深い。一方において教会を教区を越えた世界教会として捉え
つつ、他方、教区という具体的な教会や伝統を忘れ去らないか
らである。伝道、信仰覚醒、集団的回心などという「教会論
的展開や聖餐経験と無縁になり易い。ウエスレーは重厚な教会
論を抱き、伝統的な聖餐観に立ちつつ、会衆を教会訓練と聖餐
経験へと導いた。彼とその運動が単なる個人的敬虔に流れ去ら
なかつた秘密がここにある。時あたかも三十四巻から成る「ウ
エスレー全集」の出版がオックスフォード大学出版部から始ま
った。ウエスレーはその神学的オリジナリティを放ちつつ、彼

に学ぶ明日の教会と神学に、主イエス・キリストの福音をより
強くより深く証しする偉大な証人であり、主のしもべの一人で
ある。

注

- ① 岸田紀著『ジョン・ウエズリ研究』ミネルヴァ書房、一
九七七年。
- ② Geoffrey F. Nuttall, *The Puritan Spirit*, London:
Epworth Press, pp. 67~80, Owen Chadwick, "Arminianism
in England", *Religion in Life*, vol. 29, 1960, pp. 548-555,
Carl Bangs, "Recent Studies in Arminianism", *Religion in
Life*, vol. 32, 1963, pp. 421-428 など。
- ③ 『説教』上』野呂芳男訳、ウエスレー著作集刊行会、一
九六一年、三三六頁。
- ④ *Standard Sermons*, II, pp. 237-238, cf. *Letters*, III,
p. 357.
- ⑤ *The Works of John Wesley*, vol. II, (ed. G.R.Crage),
London: Oxford Univ. Press, 1975 が既刊である。
(尚、この研究発表後、拙稿を大阪基督教短期大学紀要『神
学と人文』第十六集に載せた。より詳細には拙論を御覧いた
きたい。)

(大阪基督教短期大学助教授、図書館長)